

(別紙) 栽培実験計画書

栽培実験名	スギ花粉症治療イネ（改変Cry j蓄積イネ, <i>Oryza sativa</i> L.）(OsCr11)の栽培
実施独立行政法人・研究所名	独立行政法人 農業生物資源研究所
公表年月日	平成23年6月21日

1. 栽培実験の目的、概要

(1) 目的

独立行政法人農業生物資源研究所は、遺伝子組換え技術を用いてスギ花粉症を治療する治療薬の候補としてスギ花粉症治療イネ（改変Cry j蓄積イネ, *Oryza sativa* L.）(OsCr11)を開発しました。

今回の栽培実験は、OsCr11の生物多様性影響評価のためのデータを収集するためのものです。また、収穫物は医薬品（スギ花粉症治療薬）開発の一環として、加工プロセスの開発、スギ花粉症治療米の治験薬としての有効性及び安全性の評価（動物実験）を行うための材料に使用する予定です。

(2) 概要

本栽培実験では、平成23年7月下旬から平成26年3月上旬まで、遺伝子組換えイネの栽培試験及び越冬試験を行います。栽培の詳細は以下の通りです。

2. 栽培実験に使用する第1種使用規程承認作物

(1) 作物の名称

スギ花粉症治療イネ（改変Cry j蓄積イネ, *Oryza sativa* L.）(OsCr11)

(2) 第1種使用規程の承認取得年月日等

OsCr11は、平成23年6月20日に第1種使用規程（隔離ほ場栽培における栽培、保管、運搬及び廃棄並びにこれらに付随する行為）の承認を取得しています。

(3) 食品安全性承認又は飼料安全性承認作物の該当性

OsCr11は、食品安全性承認作物・飼料安全性承認作物に該当しません。

3. 栽培実験の全体実施予定期間、年度毎の栽培開始予定期間及び栽培終了予定期間

(1) 全体実施予定期間

平成23年7月下旬 ～ 平成26年3月上旬

(2) 年度毎の栽培開始予定時期及び栽培終了予定時期等

平成23年 7月上旬	播種・育苗（閉鎖系温室及び特定網室）
平成23年 7月下旬	隔離ほ場への移植
平成23年 9月中旬	出穂期・登熟期（形態特性調査）
平成23年 10月中旬	収穫（種子特性調査）
平成23年 10月中旬～平成24年3月	越冬性の調査（栽培終了）

平成24年度以降の栽培は、平成23年度と同様に行います。ただし、平成23年度の生物多様性影響評価試験の結果及び収穫量を参考に、栽培を行うかどうかを判断します。

4. 栽培実験を実施する区画の面積及び位置（研究所等内等の区画配置関係）

- (1) 第1種使用規程承認作物の栽培規模：隔離ほ場内の水田（東西約35.5m x 南北約24.6m）約8a
- (2) 栽培実験区画の位置：茨城県つくば市観音台2-1-2（図1参照）
- 過去のデータ等から、本栽培実験区画は、イネの開花期の平均風速が毎秒3mを超えないことを確認しています。

5. 同種栽培作物等との交雑防止措置に関する事項

(1) 交雑防止措置及びモニタリング措置の内容

0sCr11の栽培区画は研究所外の最も近いほ場から約750m離れております。「第1種使用規程承認遺伝子組換え作物栽培実験指針」による交雑防止措置に従って、研究所内で試験栽培される同種栽培作物から30m以上の隔離距離をとります。また、開花期の低温により交雑の可能性が想定される場合及び開花期に台風等による強風が想定される場合には、防風ネット等で抑風します。

なお、0sCr11は食品安全性承認作物・飼料安全性承認作物に該当しないため、研究所外部との境界近くに茨城県における開花期が0sCr11の開発に用いた「コシヒカリ低グルテリン変異系統 a123」と同時期であるモチ系統「関東糯236号」を図1に示す敷地内の6カ所で栽培して、研究所外に遺伝子組換えイネの花粉が飛散していないことを確認する予定です。「関東糯236号」は移植時期を数段階に分けてポット栽培し、0sCr11と出穂期の合った集団を使用します。交雑の確認は、キセニア現象（モチ品種にウルチ品種の花粉が受粉して玄米が半透明になること）を利用して行ないます。キセニアが見られた場合には、0sCr11に導入した遺伝子の有無を検知できるPCR法による解析により、花粉源が0sCr11かどうかを判別します。交雑の確認に用いる種子数は合計1万粒以上です。

6. 研究所等の内での収穫物、実験材料の混入防止措置

- ①0sCr11の種子を研究所内の種子貯蔵庫から育苗施設（閉鎖系温室及び特定網室）まで搬出する際には、こぼれ落ちないように密閉容器に入れて搬送します。育苗した苗を隔離ほ場に搬出する際には、苗を密閉容器に入れて搬送します。
- ②中間管理作業、収穫作業に使用した機械、器具、長靴等を栽培実験区画外へ移動する際は、隔離ほ場内の洗い場において入念に清掃、洗浄します。
- ③出穂期から収穫期まで、防鳥網を設置し、野鳥等による食害及び種子の拡散を防ぎます。
- ④収穫・脱穀作業は、全て隔離ほ場内で行い、作業には専用の機械を使用するか、あるいは使用後に機械を隔離ほ場内では入念に洗浄します。
- ⑤収穫物はこぼれ落ちないように密閉容器に入れ、分析を行う実験室又は、隔離ほ場内に設置された作業小屋に保管します。

7. 栽培実験終了後の第1種使用規程承認作物の処理方法

- ①収穫した種子は、密閉容器に保管し、特性調査・安全性調査等に使用します。また、加工プロセスの開発、スギ花粉症治療米の治験薬としての有効性及び安全性の評価（動物実験）を行うための材料に使用する予定です。調査終了後の種子はオートクレーブ等により不活化した後、廃棄します。
- ②栽培を終了した植物体の地上部は刈り取り焼却処分し、残りのイネの残渣及び残った株は速やかに水をはった隔離ほ場内に鋤き込むことにより確実に不活化します。

8. 栽培実験に係る情報提供に関する事項

①栽培実験を開始する前の情報提供等

茨城県、つくば市、J A谷田部及びJ Aつくばへ情報提供を行います。今後も栽培実験の詳細について情報提供を予定しています。

②説明会等の計画

平成23年6月21日 計画書の公表

平成23年7月9日 栽培実験に係る説明会 場所：（独）農業生物資源研究所

③近隣住民への情報提供

近隣自治会の自治会長宅へ出向き栽培実験に関して情報提供を行い、各戸には回覧で栽培実験の概要と説明会等についての情報を提供します。

④その他の情報提供

栽培実験の実施状況については、当研究所ホームページ（<http://www.nias.affrc.go.jp/>）で情報提供を行います。

⑤本栽培実験に係る連絡先

（独）農業生物資源研究所 広報室

電話番号 029-838-8469

9. その他の必要な事項

（参考）

栽培実験を行う遺伝子組換えイネは、スギ花粉症の主要なアレルゲンであるCry j 1（ペクテトリアーゼ）及びCry j 2（ポリメチルガラクトナーゼ）の立体構造を改変した新規タンパク質遺伝子を「コシヒカリ a123」に導入したものです。具体的には、Cry j 1を3つの断片に分割し、個別にイネ種子貯蔵タンパク質と融合した改変Cry j 1-F1、-F2、-F3融合貯蔵タンパク質及び、Cry j 2を3つの断片に分割し、各断片の順序を入れ替えて再結合したシャッフルCry j 2タンパク質（図2：これらをあわせて「改変Cry j」といいます）を、それぞれイネ種子貯蔵タンパク質遺伝子プロモーターによって種子胚乳中に特異的に発現させています。これまでに、閉鎖系温室及び特定網室において栽培実験を行い、生物多様性への影響を調査してきました。その結果、イネの形態や生育特性、有害物質の産生性、花粉稔性や種子特性（発芽性や休眠性等）について遺伝子組換えイネ（OsCr11）と「コシヒカリ a123」との間に統計的な有意差は認められないことから、生物多様性に影響を与えないと判断し、隔離ほ場における栽培認可の申請を行いました。

※当研究所ホームページで、当研究所における研究の概要を紹介しているので参照ください。

[\(http://www.nias.affrc.go.jp/\)](http://www.nias.affrc.go.jp/)



図1 独立行政法人 農業生物資源研究所・隔離ほ場 位置

※①～⑥の番号の位置に花粉飛散モニタリング用モチイネ（関東糯 236 号）をポットで配置する予定です。

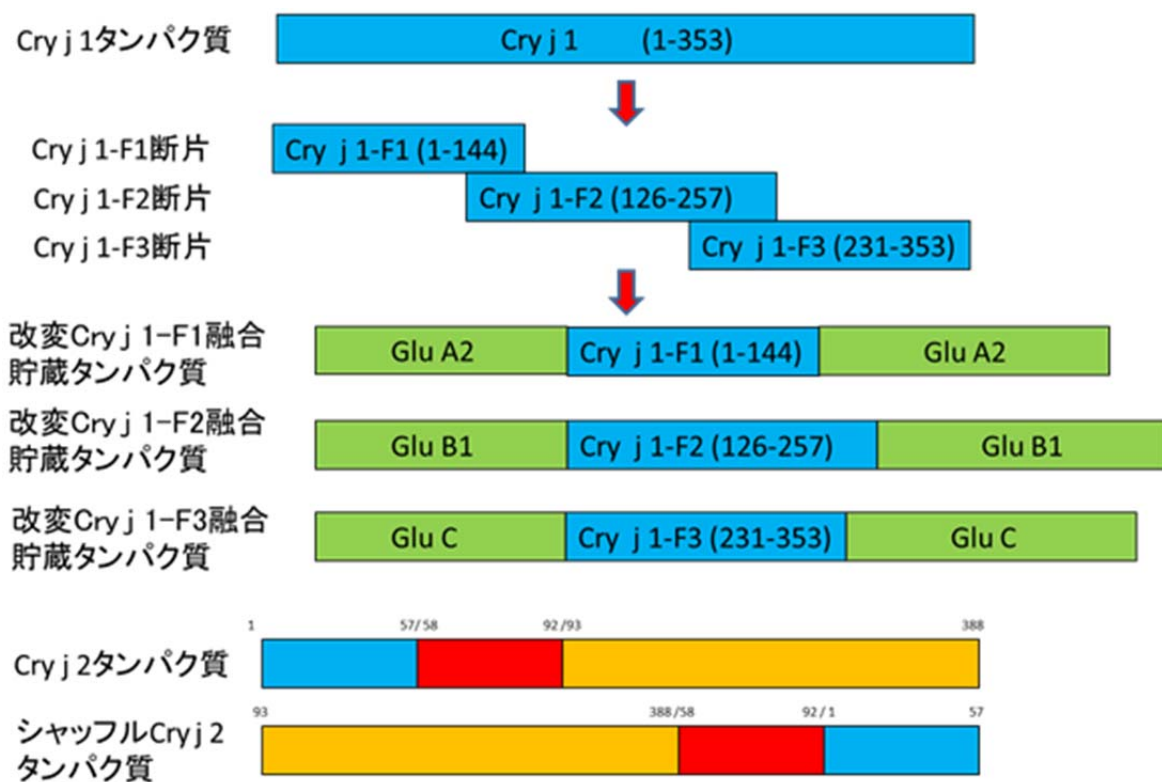


図2 改変Cry j 1-F1、-F2、-F3融合貯蔵タンパク質およびシャッフルCry j 2タンパク質

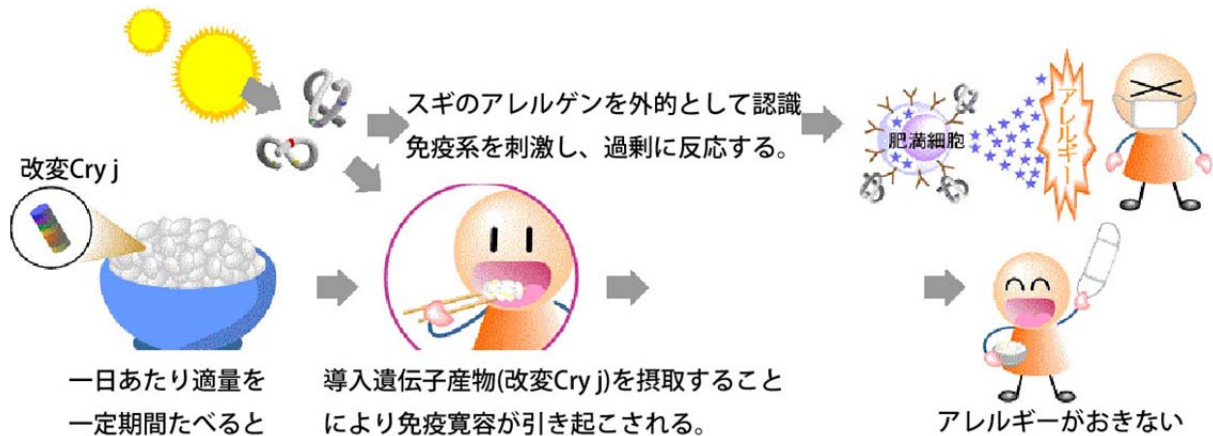
(参考)

[これまでの開発・安全性評価の経緯]

平成 19 年からアグロバクテリウム法による遺伝子導入実験、系統選抜開始
平成 21 年から閉鎖系温室における安全性評価試験
平成 23 年 3 月に隔離ほ場における生物多様性影響評価試験について、文部科学省・環境省に申請
平成 23 年 7 月農業生物資源研究所の隔離ほ場において栽培開始（予定）

[導入遺伝子の効果]

スギ花粉症では、スギ花粉に含まれる Cry j 1（ペクテートリアーゼ）及び Cry j 2（ポリメチルガラクトソナーゼ）と呼ばれる二種類の酵素タンパク質が主要な抗原（アレルゲン）として同定されています。遺伝子組換えイネでは、アナフィラキシーのリスク低減を目的として、アレルゲンの立体構造を認識するスギ花粉症患者のアレルゲン特異的 IgE 抗体との結合性を低下させるため、これら二種類のアレルゲンの立体構造を改変した新規タンパク質を発現させています。このことから、経口減感作療法に用いるアナフィラキシーのリスクが低減した免疫寛容誘発剤として導入遺伝子産物を利用できると考えられています。



[参考文献]

- 1) 斉藤洋三、村山貢司、井手武 (2006) 花粉症の科学 化学同人
- 2) 石井保之 (2009) アレルギー疾患の予防・治療の展望 生化学 81 巻 3 号 209-217.
- 3) 高岩文雄、清野宏 (2010) 医療に役立つ経口ワクチン米の開発 農業及び園芸 85 巻 1169-1172.
- 4) 高岩文雄 (2009) スギ花粉症緩和組換え米の開発 種子の科学とバイオテクノロジー 学会出版センター 153-159.